

## 時過ぎて 60 年一旅と山と教室で出会った人たちー③ 大西清見

## インカの末裔たち

2008 年 3 月下旬、ペルーを旅しました。アンデスの自然や遺跡に触れ、またペルーの人びととの交流もでき楽しい旅となりました。なかでも 3 泊 4 日のインカ道トレッキングは素晴らしく、やっとたどり着いた空中都市・マチュピチュは、今でもインカ帝国の人々が生活をしているほどの感動でした。

インカ道トレッキングは約 44 km、途中いくつかのインカ帝国時代の遺跡や 4198m の最高地点の峠（「死んだ乙女の峠」といいます）を越えて行く石造りの山道です。しかもそれは、マチュピチュに近づくに従って道造りが精巧となり、マチュピチュがいかに崇高な都市であったかということを語りかけられてくるようです。この道を歩く季節は夏から秋、雨季も終わりかけで初めて見る高山植物も見ごろでした。時々見上げるアンデスの山々も白く雄大に輝き、これからの私の人生にもいっぱいエネルギーをもらったような気持ちでした。

この 4 日間は全てテント泊、同行していただいたポーター、シェフ（ガイドを除く）は全員インカの末裔、インディオでした。歩く途中ではアンデスの花の名前をケチュア語で一生懸命に教えてくれたり、朝夕には心こもるペルー料理を振舞ってくれました。夕食の終えた夜には得意のハーモニカで「ぶどうの芽」の演奏もあり、満点の空を見上げサザンクロス（南十字星）も共に確認したのでした。なかでもポーター役をしてくれた 6 名の若者は、素足でサンダル、質素な服装で全く暗さはありません。しかも 30 歳以上もある全員の食料やテント用具を平気な顔で駆足で登っていくのですから驚きです。

ペルーのガイド（ほとんどが日系ペルー人）によると、生粋のインディオは「古代から気質を受け継ぎ、実によく働き、助け合い、そして稔りを与えてくれた大地に感謝の気持ちを忘れない」そうです。今回のペルーの旅を通して、私の知った彼らの素顔は、物静かで控えめ、しかも全員が働き者と感じました。また皇帝の絶対的な権力のインカ帝国時代も、経済的には貧しかったようですが、文化的には、きわめて豊かな社会であったことも、インディオとの触れ合いから垣間見たような気がします。ペルー・インカ道の素晴らしい自然と文化の旅でした。



\* 2008 年 3 月 31 日、インカ道トレッキング 4 日目の雨の朝、太陽の門を越えると晴れたマチュピチュの古代都市が待っていました。感動的な素晴らしい風景です。憧れの右上のワイナピチュにも登ってきました。

### ◇編集後記◇

7 月 13 日、滋賀県東近江市の西堀榮三郎記念・探検の殿堂に行ってきました。高校時代、南極に憧れて一息に読んだ西堀氏の『南極越冬記』からもっと触れてみたく、いつも私の頭の片隅に居続けている人物でした。『南極越冬記』は、今また人気のようで岩波書店から復刻されているようで、版も 1958 年初刷が第 38 刷となっていました。この著書は、氷雪と烈風の南極大陸に、日本人として最初の越冬事業をなしとげと西堀越冬隊長の記録です。厳しい自然の中で生活した 365 日、科学者の知性と勇氣に触れ、また楽しい日々の出来事が今でも私たちに励ましを与えてくれます。この探検の殿堂は、1994 年に西堀家ゆかりの地に建てられた展示館で、見どころは再現された西堀邸の居間。西堀自身が設計した山小屋風の家で、実物の家具や暖炉に、1922 年に来日したアインシュタインとの 2 ショット写真も展示されていました。当時、京都・奈良を案内したアインシュタインから「人のやらないことをやりなさい」と言ってもらったことで、その後の生き方が決定づけられたといえます。探検の殿堂は、近江鉄道で近江八幡から八日市へ、八日市からちよつことバス（一乗車 200 円）で探検の殿堂へ行くことができます。（大西清見）



西堀邸の居間を再現してありました



1922 年、アインシュタインとの 2 ショット

\*\*\*\*\*

今月も各会より会報を送っていただきました。

安治川山の会ニュース（安治川山の会）、やまなかま（泉州労山）、きたろうニュース（きたろう HC）、にしよど（西淀労山）、ぽんぽん山（高槻）、奈良県連ニュース滋賀県連ニュース、福岡県連通信、労山おかやま、やまと友の会、HC かざぐるま、京都労山、噴煙（鹿児島労山）、兵庫労山会報、県連ニュース（和歌山労山）

発行日 2019 年（令和元年）7 月 16 日 No.402

編集・発行 入澤、大西秀、笠井、園、高橋、中井、中尾、服部、大西清

\*\*\*\*\*